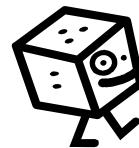


発行日：
2015年3月16日

明治学院大学心理学部 白金心理学会報

さいころ



第7号

2014-2015

白金心理学会イベント

- 2014年6月8日(白金)
白金心理学会第7回大会：
総会、2013年度研究成果
報告、2014年度奨励費獲
得者プレゼンテーション、
博士課程修了生(上野
まどかさん)による講演、
メイン企画「Do for others の
ころをかたちに見えない
障がいから考えるー」、
懇親会、開催
- 2014年12月15日(横浜)、
17日(白金)
法務技官(心理)業務説明
会
- 他、SC主催イベントは
2ページ 在学生部会活動
報告に記載

目次:

会報第7号発行に寄せて	1
白金心理学会第8回大会のお知らせ	1
在学生SC部会活動報告	2
第7回大会報告	3
研究奨励事業報告	3
博士号取得者講演	4
学内外で表彰された学生	4
メイン企画報告 「Do for othersのころ をかたちに見えない 障がいから考えるー」	5
Psychology Topic 海馬の場所細胞と格 子細胞について	6
金子先生に聞いてみよう	7
新任教員のご紹介	8
事務局よりお知らせ	8

会報第7号発行に寄せて

皆様、こんにちは。さいころ第7号をお届けします。昨年2014年は心理学部開設10周年の節目の年にあたり、12月13日に10周年記念シンポジウムと祝賀懇親会を開催いたしました。シンポジウムでは「心理学部10年の歩みと展望」というタイトルで、心理学部のこれまでの歴史を振り返りつつ今後の展望について議論しました。祝賀懇親会では学長始め学部長の先生にも何人かおいでいただき、また教員OB、卒業生、事務の旧スタッフの方々など多くの方にご参加いただきました。厚くお礼申し上げます。また学部が10周年ということは学部附属研究所も10周年を迎えることでもあり、こちらの記念行事としては、10月25、26日に研究所開設10周年記念公開セミナー「ストレス社会を生き抜くには」と題して、様々なストレスについてご講演いただきました。これからは、次の10年に向けて、学部の更なる発展を目指していきたいと思っております。

学部の発展は、白金心理学会の発展と深く関連

花田 安弘 学会長(心理学部長)



花田 安弘先生

します。現役の学部生を対象として研究費を補助する制度が始まり、その審査結果や前年度の受給者による報告を大会で行うため、最近は関係する学部生の大会への参加が増えてきているのは喜ばしいことですが、卒業生の皆様の大会へのご参加はまだまだ少ないのが現状です。今年の6月14日の大会では、「今、学校で何がー小学校教員が語る教育現場ー」と題して、シンポジウムを行いますので、教育発達学科の卒業生の皆様にはぜひ多数のご参加をお願いしたいと思います。より多くの卒業生の皆様にご参加いただくために、どのような大会や学会活動を行っていけば良いのか、ご意見を伺って考えていきたいと思っております。今後とも宜しくお願いいたします。

白金心理学会第8回大会のお知らせ

みなさん、こんにちは。寒さの厳しい日が続きましたが、いかがお過ごしでしょうか。

さて、白金心理学会第8回大会が6月14日(日)に開催されることになりました。今回は大会テーマを「今、学校で何が」と設定しました。前回大会に引き続き「参加しやすい大会」、「参加してよかった大会」をめざして、内容や演者の選定に工夫を凝らしました。

まず、総会では白金心理学会のさまざまな活動と計画についてご報告いたします。

続いて、第5回大会より始めた研究奨励費獲得者の研究成果報告と今年度の獲得者による研究計画の発表があります。これは白金心理学会が研究を奨励する目的で1件につき5万円の奨励費を交付するものです。昨年度からは、活動奨励費という枠(1件2万円)も設け、よりハードルを低くして調査や実践的な活動にも補助をしていくことになりました。昨年度は大学入学間もない1年生も活動奨励費を獲得しましたので、今大会でその成果を聞くことが出来ます。

出井 雄二先生(教育発達学科准教授)

次に、最近の心理学部や学生の最新の動向をみなさんに紹介します。今回も学内外で表彰を受けた学生の紹介を予定しております。

そして、今大会のメイン企画として、「今、学校で何が」というテーマでシンポジウムを行います。学校教育の柱となっている学習指導、生徒指導、学級経営の3つの視点から、今現在学校現場に関わっている3名からの話題提供とディスカッションの時間を設けました。学校あるいは教育に心理学はどう関わっていくのかを考える機会にしたいと思っております。

また、例年好評のティー・ブレイクの時間もありますので、話題提供者への質問はもとより、お世話になった先生に近況を報告するなど、有意義にお使いいただければと思います。

もちろん夕方からは例年と同じく懇親会も予定しておりますので、こちらも是非ご出席ください。同級生、先輩後輩、教員との親睦を深めていただければと思います。

多くの方の参加をお待ちしています。

在学生部会SC活動報告

第13回キャリア支援イベント 「私、院に行きます2014」

第一部全体説明会、第二部個別相談会と二部構成で開催しました。
多めに取った個別相談の時間も足りないという声があがるほど、皆さん熱心に話を聞いていました。



私、院に行きます2014の様子

第2回 院生とごはん

昼休みの時間を使い、大学院生と学部生との交流を目的に開催しました。
アンケートでは、「楽しかった」、「為になった」という声を頂きました。

第14回キャリア支援イベント 「院進学イベント～院生とお話しよう～」

例年の講演会形式を座談会形式に変更して開催しました。
アンケートでは「前年より質問しやすかった」「聞きたいことが遠慮せず聞けた」と高評価でした。

第15回キャリア支援イベント 「法務技官(心理)業務説明会」

現職法務技官である卒業生が来校し、法務技官の仕事について話していただきました。
法務技官を知らない参加者が多く、熱心に話に耳を傾け、質問コーナーでは積極的に質問をする様子が見られました。



法務技官業務説明会の様子

(大学院SC)

大学院SCでは、白金心理学会の運営補佐に加えて、院進学希望者を対象とした情報提供・交換を目的としたイベント「私、院に行きます。」や、大学院生と学部生の交流の場として「院生とごはん」を開催しました。「私、院に行きます。」ではSCの院生を中心として、3コースの特徴を講演。また、院進学に不安を覚える学部生を対象に個別相談会も設け、院生の生活や院受験についての細かな質問にも応じました。多くの学部生から「参考になった」「参加して良かった」といった声を頂くことができました。加えて「院生とごはん」では、院生と学部生と一緒にランチをしながらおしゃべりに興じました。院生から院生生活についてや院受験時の卒論との両立といった情報を話したことで、多くの学部生から「院進学に更なる関心が湧いた」との声を頂くことができました。

(3年SC)

在学生部会では、新入生の支援を目的として、フレッシュャーズ研修とスポーツ交流会を毎年企画しています。3年が中心となり、4月にフレッシュャーズ研修を開催しました。フレッシュャーズ研修では学校生活についてのガイダンスや、クラスごとに分かれてクラスアドバイザーの先生方にクラスミーティングを行っていただきました。またソーシャルスキルトレーニングの一環としてスーツを着用し都ホテルで食事会も行いました。研修終了後に新入生の抱えている様々な疑問や不安に対して相談の場を設けました。

(2年SC)

新入生の支援を目的とする学科交流会は2年が中心となり実施しました。1年生を対象に、6月に心理学科、5月に教育発達学科で開催しました。じゃんけん列車やボール渡しゲームなど大勢で楽しめるレクリエーションや、大縄跳びやリレーなど軽いスポーツを取り入れました。また、心理学科では新たに2年生を対象とした交流会も10月に行い、バスケットボールなどを行いました。教育発達学科では12月にも1年生が企画し交流会を開催、フットサルやドッジボールを楽しんでいました。2013年度までは

「スポーツ交流会」という名前でしたが、今年度はスポーツを外し「学科交流会」とし、スポーツに苦手意識を持つ新入生も参加しやすいようにしてみました。新入生の参加者は増加傾向にありますが、心理学科2年生の交流会は初めてということもあり、参加者はごく一部でした。新年度ではより多くの2年生に参加してもらえよう頑張りたいと思います。この企画は、体を動かしながら新入生同士はもちろん、先生方や、SC内での交流も深められるいい機会となりました。

同年12月1日と5日には、臨床系、基礎系、発達系の大学院生並びに院進学予定の当大学4年生の方々をお招きし、キャリア支援イベント「院進学イベント～院生とお話しよう～」を開催しました。今年は例年の講義形式を変更し、テーブルを囲んでグループになり、質問や相談を和気藹藹と行う座談会形式にしました。それにより、院生とより親密なコミュニケーションを取ることができたと思われま

す。
1月から21名の新たなメンバーも加わりました。これまで以上に精力的に活動できるよう、一丸となって頑張りますので今後ともよろしく願い致します。

SC活動一覧

4月	フレッシュャーズ研修(1年生)
5月	教育発達学科交流会(1年生)
6月	白金心理学会第7回大会 運営補佐 心理学科交流会(1年生) 第13回キャリア支援イベント 「私、院に行きます2014」(3, 4年生)
7月	「第2回 院生とごはん」(3, 4年、院生)
10月	心理学科交流会(2年生)
12月	教育発達学科交流会(1年生) 第14回キャリア支援イベント 「院進学イベント～院生とお話しよう～」 (1, 2年生) 第15回キャリア支援イベント 「法務技官(心理)業務説明会」補佐 (全在生)
1月	新SC研修会

第7回大会報告



白金心理学会
第7回大会が、
2014年6月8日
(日曜日)、
本学白金キャン

パス2301教室で開催されました。今年度のテーマ「Do for others のここをかたちに」の下、卒業生、修了生、学部生、大学院生それに教職員など、175名の参加がありました。大会終了後に行われた懇親会には、75名の参加があり、懐かしい思い出話に、お互いの近況報告に、有意義なひと時を過ごすことができました。

大会では、総会に引き続き、2つのタイプの学術研究が披露されました。1つは会員の学術的な取り組みに関するもので、2013年度に研究奨励費を獲得した3つの研究の成果報告、2014年度に研究奨励費を獲得した2つの研究及び活動奨励費を獲得し

松村 茂治先生(教育発達学科教授)

た3つの研究についてのプレゼンテーション、それに博士号取得者による講演がありました。もう1つは、Tea Breakを挟んで行われた、本年度のメイン企画の「Do for others のここをかたちに一見えない障がいから考える」でした。

個々の研究については、他で詳述されると思うので、ここでは私見を交えて、概括的なところを述べておきます。会員の学術的な取り組みについては、学部1年生の奨励費の獲得もあり、頼もしく思うとともに、これは大変恵まれた制度なので、これからも大勢の会員の申請を期待したいと思います。また、メイン企画については、共生社会に向けての動きが活発化する中、タイムリーな取り組みと思えました。とりわけ、自分たちの身近なこと、自分たちにできることを大事にした等身大の取り組みに好感を持つことができました。参加者の皆さま、運営に携わった皆さま、どうもありがとうございました。

研究奨励事業報告

野村 信威先生(心理学科准教授)

今年度は以下の成果報告および研究計画発表が行われました。

1 2013年度研究奨励費獲得者による研究成果報告

白金心理学会第7回大会において2013年度の研究奨励費獲得者による3件の成果報告が行われました。心理学科4年生の田村豪さんほか16名による「地方自治体のwebページにおけるユーザビリティ条件の検討」では、8つの市のサイトを閲覧して市章と母子手帳の交付場所についての探索課題を設けた実験により、ユーザビリティの高いサイトを検証しました。その結果母子手帳課題では探索時間と主観的な使いやすさの間に有意な相関は認められませんでした。そこで利用者の語彙空間と探索時間の関連を調査したところ、母子手帳から連想するカテゴリ(例：病院)と実際のサイト上のカテゴリに違いがあることがユーザビリティを下げる原因だと考えられました。



心理学科4年生の松村佳美さんほか6名による「『かわいい』がポジティブ表現として機能する要因」では、大学生を対象とする質問紙調査から「かわいい」と言われた際の感情を測定したところ、女性では「うれしい」や「ありがたい」という感情が生じやすい一方、男性では「はずかしい」感情との結びつきが強く、「かわいい」という言葉はポジティブな機能のみを持つのではないと考えられました。

そして博士前期課程2年の室井猛さんほか2名による「出生順位とパーソナリティの関連」では、出生順位が性格と養育態度に与える影響を検討しました。大学生に質問紙調査を行い、長子と末子と一人っ子を比較したところ、「新奇性追求」や「損害回避」「報酬依存」などの気質で差が認められ、性別と出生順位による

性格への影響が部分的に認められました。これらの成果報告論文は、学会HPにて要旨を公開します。

2 2014年度研究奨励費および活動奨励費獲得者の発表と研究計画発表

2014年度は従来の研究奨励費に加えて新たに全学年に応募資格を広げた活動奨励費を設けました。それぞれの奨励費に対して7件の応募があり、厳正な審査の結果、2件の研究奨励費への申請と3件の活動奨励費の申請が採択されました。

研究奨励費が採択されたのは、博士前期課程1年の塚本裕子さんほか17名による「大学生の防災意識と震災支援」と心理学科3年生の大森崇弘さんほか16名による「広告(CM)の視聴印象が広告に対する態度や購買意欲に及ぼす影響」でした。



活動奨励費が採択されたのは、心理学科2年生の佐久間千夏さんほか8名による「学生生活満足感と心理・属性変数との関連性」、心理学科1年生の木村紗友里さんほか6名による「親切行動の要因について」、そして心理学科1年生の久松美稀さんほか4名による「アサーションパターンとシャイネスの関連性」でした。



白金心理学会では今後も皆さまの研究活動を支援してまいりますので、積極的なご応募をお待ちしています。

心理臨床家の動機と心理臨床活動における困難および満足感との関連 —志望動機のタイプ「苦悩型」と「消極型」に着目して—

上野 まどか



上野 まどかさん

膨大な博士論文を30分という短い時間の中でコンパクトにご講演頂きました。

臨床に密着してのその内容に、学生からは、自分の将来について考えさせられた、卒業生からは、一支援者として身につまされた、自己点検をしたいと思ったなどの、アンケートの声を頂きました。

臨床心理士を目指す学生からも、なぜそうしたいかの自分の欲求の背景を考えるきっかけになったと、学生たちもおおいに刺激を受けたようです。

心理臨床家が自らの職業を選択した背景に苦悩体験があると示す研究が多く見られます。本研究では、心理臨床家の志望動機の実態について量的および探索的に検討した上で、苦悩体験を機に志した心理臨床家の臨床活動における体験を質的に検討しました

まず、心理臨床家志望動機尺度を作成・実施した結果、志望動機は「消極型」「知的型」「経済型」「状況困難型」「苦悩型」「関係型」の6タイプに分かれ、これらのタイプによって、関連のある属性（理論的志向性など）が異なることが示唆されました。

次に、「苦悩型（苦悩体験が志望動機）」の臨床活動における体験を検討した結果、「苦悩型」は、感情や役割の境界が曖昧になったり、困難の原因が臨床家（自分）に起因していると体験されやすく、内省的・対自的特徴が見られました。自己の心理的成長と臨床家としての成長が相互に促進し合う様子も伺えました。これは、状況や対外的側面に着目した語りが多い「消極型」の体験の様相と異なるものでした。また、協力者の動機の職業的・個人的側面への

影響に着目したところ、協力者の語りには一貫性のある同質の個人的な動機・感情・欲求があることがうかがえ、それを「個人的テーマ」と決めました。個人的テーマを客観的に語り、CLのニーズを優先した語りが見られる「安定」状態にある場合には、臨床活動において「CL中心」であることが見出されました。個人的テーマによって強い情動や葛藤が引き起こされている、現在も個人的テーマに取り組んでいる、もしくは個人的テーマがあっても取り組まれない「活性」状態にある場合には、臨床活動や個人的生活において、「境界曖昧」、「苦悩持続」、「個人的生活充足」、「満足」、「CL中心」の体験パターンがあることが見出されました。

最後に、個人的動機を客観的に捉えCL中心の態度を保つ必要、自己理解の必要性とその難しさ、心理臨床家の倫理的意思決定やセルフケアを促進する臨床心理学領域全体の風土構築の重要性が示されました。

学内外で表彰された学生



懇親会会場でも、表彰された学生が紹介されました。

1. 2013年度第36回学生懸賞論文保証人会会長賞
心理学科2年（現3年） 秋庭 くるみ
課題「食の安全について」
応募論文テーマ
「期限表示を通じて食の安全の確保と食品ロス削減を一求められる意識向上と工夫—」

2. 2013課外活動奨励賞

- ①スポーツ活動奨励賞個人賞競泳（平泳ぎ）
心理学科2年（現3年） 市原 佳奈
 - ・日本選手権50m平泳ぎ17位
 - ・同 日本ランキング18位
 - ・課外活動奨励賞は2年連続の受賞

- ②スポーツ活動奨励賞個人賞（努力賞）空手
教育発達学科4年（2013卒業生） 妻鳥 剛征
 - ・全日本空手道剛柔会全国大会組手の部3位

- ③スポーツ活動奨励賞団体賞 少林寺拳法
教育発達学科2年（現3年） 返田 暢
 - ・少林寺拳法全日本学生大会男女茶帯の部
第1位

3. 品川区社会福祉協議会 会長 感謝状
心理学科 杉山ゼミ 地域支援研究グループ
「長年にわたる地域ボランティア活動による地域福祉の増進に対して」

本企画では、「見えない障がい」に対する啓発や支援活動をなされている三組の話を招き、ご自身の取り組みについて講演頂きました。見えない障がいとは、学習障がいや発達障がい、神経系難病のような外見からは困難を持っていることが判断し難いものを指します。

第一話者の明治学院心理学部心理学科4年の小林千也さん、安楽夏子さん、田原奈美さんの調査グループからは、授業科目「心理支援論」での活動報告「見えない障がいバッジについて」の内容をご講演頂きました。このバッジは、第二話者の大野更紗さん、児玉剛さんが運営されている「見えない障がいバッジ応援プロジェクト」※が製作する、アウェアネス・リボン型のバッジで、見えない障がいやその当事者に関する認知度の向上を目指し2011年に誕生したものです。

小林さんらの活動グループは、「見えない障がい」に関する知識の不足が、差別や偏見を間接的に生じさせ、それが当事者の方々の心理的負担になっているのではないかと、という問題意識の下、明治学院大学の学生に対して、バッジの広報活動を通じた、見えない障がいの啓発活動を実施されました。具体的には、見えない障がいバッジの広報用三角POPを作成し、学生食堂の机上にて啓発活動を実施しています。このPOPには、1)バッジの紹介、2)見えない障がいの症例の説明の他に、3)作成者の大野更紗さんへのインタビュー記事も掲載されています。学生へのアンケート調査の結果から、このPOPがバッジや障がいに対する認知度を向上させ、更なる理解への契機となったとのことでした。

第二話者の大野更紗さんと児玉剛さんからは、見えない障がいバッジが作成されるまでの経緯と社会の反応、そして、今後の取り組みについてご講演頂きました。

作家であり、かつ本学大学院生でもある大野さんは、2008年に難治性疾患を発症されてからの壮絶な闘病生活の中で、難病患者に対する我が国の障害福祉制度の不備に直面されました。そのご経験の一部は、大野さんのご著書『困ってる人』（ポプラ社）に記述されています。（見えない障がい）当事者に対する我が国の制度に不備があったとして、それは容易に改善するものではないので、まずは、そのような障がいや苦しむ人が存在することを少しでも多くの人々に知ってもらいたいという思いから、（大野さんのお言葉を借りれば）“見切り発車的に”Twitter上での啓発活動を開始されたとのことでした。

見えない障がいバッジは、そのTwitter上での活動から生まれました。児玉さんのお話では、初回

川端 一光先生(心理学科専任講師)

200個作成したバッジでしたが、各種メディアでの宣伝効果が大きく、特にYahooのトップページに掲載された当日には、7000個を超えるオーダーがあったそうです。社会的反響が大きい活動であるので、企業やNPOにコンサルテーションを依頼して、より組織的に活動することも可能かもしれないが、そうとはせず、現状のようなボランティア活動にこだわっているのは、バッジの使われた方に配慮されたとのことでした。

「かわいそうな人に印を付けて助けてあげるバッジには絶対したくない」という児玉さんのお話から、製作する側の意思が購入者に正確に伝えられるような組織作りや情報伝達チャンネルが、この活動において重要であることが理解できました。

第三話者は明治学院大学学生サポートセンター富岡美紀子さんでした。富岡さんからは、本学学生サポートセンターの見えない障がいに対する支援の実際についてお話頂きました。

富岡さんからは、障がいのある学生の実態として、これまでの主たる障がいは、肢体不自由であったのに対し、2012年度以降は、病弱・虚弱、精神疾患、精神障がい、発達障がいといった見えない障がいの症例が上位を占めるようになってきているというお話がありました。障がいをもつ学生への合理的配慮が、善意から法令順守に厳格化され、大学としてのきめ細やかな対応が求められる中、本学学生サポートセンターでは、100名の学生サポートスタッフとともに、他大学に先んじて様々な支援が行われているそうです。例えば、聴覚障がい者に対する手書き・パソコンによるノートテイク、視覚障がい者に対するリーディングサービス、点字サービス、移動困難者に対する移動支援、そして、それら支援者の為の養成講座等、非常に多様な支援が実施されています

入学の時点で支援の必要性が分かっている学生に対しては、学生本人や保証人は勿論、学部・学科のスタッフとも入念な打ち合わせをするなどして、より快適な就学環境の実現に務められているとのことでした。

以上まとめると、見えない障がいに対して、様々な立場から、様々な啓発・支援活動が可能であるということが実感できる企画でした。しかも、どの啓発・支援活動も、我々にとって敷居が低く、参加し易いもののように感じられました。パネルディスカッションで児玉さんが仰られていたように、ちょっとした支援でもいいから数を打ってみようという精神で、まずは自分が出れる範囲のことに取り組んでみてはいかがでしょうか。

※ <http://watashinofukushi.com/>



講演者(右から)
大野 更紗さん
児玉 剛さん
サポートセンター
富岡 美紀子さん



(左から)
コメンテーター
金子 健先生

講演者
小林 千也さん
田原 奈美さん
安楽 夏子さん



見えない障がいバッジ

難病、内部疾患、発達障がいなど、社会で認知されず、福祉政策でも「制度の谷間」に落ち込み、サポートが受けにくい「目に見えない」障がい、困難、痛みをもつ人が数多くいます。「バッジをつけて、見えない障がいを知ってもらおうよ。」twitterのみんなの声から、このバッジはうまれました。『大切なものは目に見えない』『星の王子様』のきつねの秘密が刻んであります。

(見えない障がいバッジプロジェクト応援HP「わたしのふくし。」より抜粋)



戸塚校舎にラットの飼育舎があるのをご存知ですか？現在20匹程度のラットが飼育されているそうです。詳しくは、花田先生まで。

私たちは空間の中の自分の位置を瞬時に認識できる。この能力がなければ、広い美術館を動き回って見たい絵画を探しあてたり、地図を頼りに待ち合わせのレストランに到着することはできない。私たちの脳内の一体どこに、空間を正しくナビゲーションするための仕組みがあるのだろうか。オキーフ博士とモーザー博士夫妻は“脳内GPS”ともいえる仕組みを、脳の海馬とそれに隣接する嗅内皮質に発見した。

今いる空間を座標のように伝達する細胞を格子細胞(Grid cell)と名付け、特定の場所を記憶する細胞を場所細胞(Place cell)と名付けた。

RIKEN BRAIN SCIENCE
INSTITUTE
in.riken.jp/jp/youth/place-cell_and_grid-cell
より抜粋

海馬の場所細胞と格子細胞について

2014年度のノーベル生理学・医学賞を受賞したオキーフ博士とモーザー博士夫妻の計3名は、2002年にノーベル経済学賞を受賞したカーネマン博士（認知心理学、行動経済学）と同様に実は心理学者（生理心理学）である。ノーベル賞には残念ながら心理学賞はないが、分野によってはノーベル賞を取ることも可能であり、これから研究者を目指す方は是非目標にして頑張っていたきたい。

さて、オキーフ博士とモーザー博士夫妻の受賞理由は「脳における空間認知システムを構成する細胞の発見」であり、オキーフ博士は1971年にラットの海馬から場所細胞(place cell)を発見し(文献1)、モーザー博士夫妻は2005年にラットで海馬に隣接する嗅内野から格子細胞(grid cell)を発見した(文献2)。以下、彼らの研究を紹介しながら、空間認識の仕組みについて述べることにしたい。

場所細胞とは、環境内のある特定の位置に動物がいるときに活動が増える細胞のことであり、その位置は細胞ごとに異なっている。その位置のことを場所野(place field)と呼ぶ。場所野の広さは細胞により多少異なるが、ラットがその領域に入るとその細胞の活動が増加し、その領域の中心の位置で活動は最大になり、中心を過ぎるにつれ活動は減少する。この時同時に海馬の脳波を記録すると、シータ波と呼ばれる10Hz程度の正弦波状の脳波が見られ、そのシータ波の位相(山や谷のこと)と場所細胞の発火のタイミングに関連があり、場所野に入り中心を通過して場所野から抜けていくにつれて、発火のタイミングがシータ波の位相上で前に進む(場所細胞が発火したシータ波の位相上の位置が、最初は遅い位相で発火し、次第に早い位相で発火するようになるということ)位相前進(phase precession)という現象も見つかっている(文献3)。ある場所を認識する場所細胞は1つではなく、場所野に少しずつ重なりを持つ場所細胞がいくつか存在している。場所細胞Aと場所細胞Bの場所野に一部重なりがあっても、位相前進の結果、その2つの細胞の発火のタイミングはシータ波の位相上で同一とはならず、より安定した細かい位置の特定が可能になると考えられる。

格子細胞は海馬へ情報を送る嗅内野で発見された細胞であり、海馬の場所細胞と同様に空間内の

位置により活動が変化するが、場所細胞が空間内のある特定の1か所の位置で活動が増加するのに対し、格子細胞は空間内の多数の位置で活動が増加する。格子細胞の活動が増加する位置は、正三角形を空間内に敷き詰めたそれぞれの頂点の位置に存在しており、碁盤の目状の位置ではない。空間内の多数の位置で活動が増加することから、海馬の場所細胞よりも、同時に活動する細胞の数が多くなることになるが、空間に対する格子の向きは細胞により異なっていて、発火する位置が完全に重なっているということはない。格子細胞は海馬の場所細胞に投射しており、複数の格子細胞のうちどの格子細胞が同時に活動しているかによって、空間内の格子状のいくつかの点のうち実際にはどの位置にいるかが特定され、その位置を場所野とする場所細胞が活動すると考えられている。

最近では場所細胞、格子細胞以外にも、頭の向きにより活動を変化させる頭部方向細胞(head direction cell)(文献4)や環境の中の境界(壁など)で活動を増加させる境界細胞(boundary cell)(文献5)なども発見されており、これらの細胞の活動も含めて、空間の位置の認識がなされていると考えられている。

空間の位置の認識は、場所と出来事を連合し記憶するために必要であり、この連合は生物の生存にとって非常に重要である。海馬の場所細胞の活動が報酬により変化することが報告されており(文献6)、また最近では海馬と腹側線条体が場所と報酬の連合に関与する(文献7)という報告も出てきている。これらの研究の更なる発展により、場所と出来事を連合させる記憶であるエピソード記憶の仕組みも遠からず解明されることが期待される。

文献

- 1 O'Keefe and Dostrovsky 1971 Brain Res.34:171-175
- 2 Hafting et al.2005 Nature 436:801-806
- 3 O'Keefe and Recce 1993 Hippocampus 3:317-330
- 4 Taube et al.1990 J Neurosci.10:420-435
- 5 Lever 2009 J Neurosci.29:9771-9777
- 6 Holscher et al.2003 Behav Brain Res.142:181-191
- 7 van der Meer and Redish 2011 J Neurosci.31:2843-2854

金子先生に聞いてみよう♪

飯田 友希・近江 辰一・深水 脩登
(在学部生SC)

2015年2月9日、私たちは白金校舎の教室で、今年度で退職される金子先生にインタビューを行いました。

——「1番大きいところではあるのですが、先生が心理学を学ぼうと思った理由はなんですか？」

先生「授業でも言ったと思うけれど、私の弟が障害を持っていて彼を何とか支援してあげたいと思ったのが始まりですね。大学に入る直前だったかな。始めは理系志望だったんだけど、もっと人間的なことを学びたくなくてきて、且つ、弟のためになること・・・と考えて心理学をベースにした特別支援教育(当時は特殊教育)を学ぼうと思いましたね。」

——「ちなみに心理学を学ぼうと思う以前の理系というところのような・・・？」

先生「電子工学みたいな感じですね。若干オタクのような・・・！」

——「真反対ですね！」

先生「そうだね。始めは工学部を受けたのだけど落ちてしまって。そこから浪人をしている間に考えが変わりました。」

——「その後大学に入って、どのような経緯で大学の先生になろうと考えられたのですか？」

先生「学校の先生になるという選択肢もあったんだけどね。それより、もっと広く深く学びたいと思っていたので、大学に入った時にはもう、大学院に進んで研究者になろうと考えてはいました。大学院も合わせて11年くらいいました。」

——「その当時、その後のお仕事についてはどのようにお考えでしたか？」

先生「今もそうだけど、当時も大学院を出ても就職口はあまりなくてね、初めて見つけたのが国立の特殊教育総合研究所の研究員について、5年。そのあとはずっと明治学院で教員です。」

——「自分たちが生まれる10年前ですね！」

先生「そのころはまだ心理学部がなかったから、文学部の教職課程で養護学校教員免許取得のための授業を担当していました。」

——「どんな学生時代を送ってらっしゃいましたか？」

先生「障害児のためのサークルをやったりもしていました。後は、学生運動ですね。国会議事堂まで行ったりもしましたよ。」

——「とてもアクティブな学生時代ですね。そんな学生時代を送られてきて、最終的に明治学院の教員になられて、数多くの授業をされてきたと思うのですが、金子先生が授業で1番大切にしていることは何でしょうか？」

先生「人間にはいろんな人がいて、みんな違ってみんないい。それぞれの存在が尊重されるべきなんだということ。そんな社会を作っていくというのが学生時代からのモットーです。そのために学生達に何をどう伝えていくか考えてきたけれ

ど・・・。それが上手くいったかどうかは分からないな。でも昔に比べて、考えてくれる人が増えてきたと思う。そのほんの少しのきっかけになればいいなと思います。」

——「私たち明学生の素敵なおところはどんなところでしょうか？」

先生「ただ単に知識を詰め込もうとするのではなく、子どもたちや保護者の方々と一緒に成長していくとする、そんな人が多いと思います。とてもうれしく思いますね。そこから教員になった卒業生もいれば、教員にならずに違う職業に就いた卒業生もたくさんいるけれど、それはそれで、大学で学んできたことを様々な職業の中で形にしていってくれればいいなと思います。そうやって社会に少しずつ私のモットーのようなことを理解してくれる人が増えていってくれればいいな、なんて考えますね。」

——「今も少しずつ、理解してくれる人が増えていっている、その一方で、障害者や高齢者の方々を転ばせるだとか、嫌がらせをする人たちもまだいるわけですが、ここからさらに理解者を増やすにはどのようにすればいいと思われますか？」

金子先生「小さいころから色々な人と関わっていくことかな。そもそも、特別支援教育という名前が本当は良くないのかもしれないです。特別な人なんていないわけですから。そうやって小さいころから触れ合っていく中でお互いのことが分かっていく。誰もがみんな同じ人間だということが広まっていく。まだまだ時間はかかるのだろうけど。そんな淡い期待を持っています。」

——「今在学中の明治学院生へ一言お願いします。」

先生「信念をもって自分が良いと思う方向へ積極的に進んで行ってほしいなと思います。うじうじしたり、突っ走ったり、それを繰り返しながら、それぞれの方向へ一生懸命頑張っていくください。」

——「最後に、金子先生にとって特別支援教育とは？」

先生「今、目の前にいる子どもが既に特別な存在であること。でも、その子どもたちの間には差はなくて、そういう意味では特別な子どもは1人もいない。特別が特別でなくなっていくもの。そのような教育だと思います。」

気さくに話して下さる先生の優しいお人柄と特別支援教育に対する熱い思いに触れることができました。授業だけでは聞くことのできない数々の話が聞け、とても有意義な時間でした。金子先生、お忙しい中時間を作って下さり、本当にありがとうございました。

インタビューの様子



いつもと変わらぬペースで、ゆっくり落ち着いて話される先生。インタビューも穏やかに進みます。



学生時代の話の中で、奥様との出会いのエピソードが。「学生結婚だったんですね」とおどろく3人。



ほとんど休みなしの日々だったそうで、退職したらまず「ゆっくり温泉にでも行きたいねえ」と語る金子先生。



最後に全員で写真撮影。

(左から) 深水 脩登さん
飯田 友希さん
金子 健先生
近江 辰一さん

新任教員のご紹介



佐藤 公先生

佐藤 公先生 はじめまして、2014年4月に教育発達学科に着任しました佐藤公（さとうこう）です。専門は学校教育学、社会科教育学です。授業等の教育実践を支える教育課程の歴史を中心に研究を行っています。教育を考える第一歩は、誰もが持っている、過去・現在の教育経験にあります。自身の中に読み取れる教育の姿とは、その時々の変化によって生じた課題と向き合い、改善を繰り返してきた営みです。同時に、これからの教育を考えるヒントもまた、自身の経験とこれからの学びの中から生み出すものです。私自身も自らを掘り下げながら、学生のみなさんと共に、これからの教育を考える機会を楽しみにしています。どうぞよろしくお願いたします。

事務局よりお知らせ

○白金心理学会第8回大会のご案内

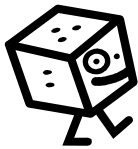
来る2015年6月14日（日）13：00から白金校舎において「白金心理学会第8回大会」を開催いたします。当日は懇親会も開催しますので、同期の仲間や後輩たちに会ういい機会になれば幸いです。皆様お誘いあわせの上ご参加下さい。（大会・懇親会共に当日参加も可能ですが、資料、料理の手配の関係上、白金心理学会HPからの事前申し込みにご協力ください。なお、懇親会のみ有料です。）

○教員の動向

2015年3月末にて、金子健先生（教育発達学科教授）、山崎晃先生（心理学科教授）、石井国雄先生（助手）、小嶋明子先生（助手）、渡邊流理也先生（助手）が退職されました。

2015年4月より、清水良三先生は、教育発達学科から心理学科へ移籍されます。

今年度のサバティカル（特別研究休暇）は宮本聡介先生と小林潤一郎先生です。今年度は出校されませんので、ご注意下さい。



白金心理学会
イメージキャラクター
「さいころくん」

○卒業生のみなさまへ 白金心理学会にご入会下さい！

すでに心理学部および心理学研究科の皆様には入学・進学時にリーフレットを配布しご案内しておりますが、在学期間中は学会費として一人年間2000円をお預かりしております。

卒業生の皆様におかれましても、この機会に是非ご入会下さいますようお願いいたします。

お預かりした会費は、次のような活動の費用に充てられます。

- ①心理学部（前身諸学科含む）卒業・修了生、教員、在学・在院生、との交流会の企画および運営
- ②在学・在院生、卒業・修了生のキャリア支援のためのイベント企画及び運営
- ③心理学部（前身諸学科含む）、心理学研究科名簿管理
- ④年次大会・総会開催、会報発行、講演会企画及び運営
- ⑤白金心理学会に関わる広報活動

ご不明な点は、白金心理学会事務局までご連絡ください。皆様のご入会をお待ちしております。

○卒業後の住所変更登録にご協力下さい！

卒業時から住所が変わっている方、また、ご実家の住所が変わっている方は、白金心理学会事務局にご一報ください。住所変更登録は白金心理学会HPトップ画面右下「卒業生へのお願い（連絡先変更登録）」より登録できます。ご協力をよろしくお願いいたします。

○事務局は移転しました。

事務局は、白金校舎本館6階心理学部共同研究室より、11号館302号室に移転しました。

発行：

明治学院大学心理学部
白金心理学会 事務局

〒108-8636
東京都港区白金台1-2-37
明治学院大学11号館302号室

TEL&FAX:
03(5421)5814

問い合わせ用E-mail:
shinro@psy.meijigakuin.ac.jp

白金心理学会第8回大会
参加申し込み及び住所変更
は下記URLまで

URL: [http://
psy.meijigakuin.ac.jp/shiropsy/](http://psy.meijigakuin.ac.jp/shiropsy/)